

唐詩詩語「欵枕」の漢文訓読語としての

「枕をそばだてて（聞く）」（側臥）

安部清哉
中山大輔

要旨——唐詩詩語「欵枕」の本邦での訓読「枕をそばだてる」は、平安朝以降定着しているが、その意味と訓読の適否については、いまだ定説がない。本稿では、この漢文訓読語「枕をそばだてる」の意味の解釈に、埋田重夫氏の「欵枕」の解釈（側臥）を踏まえて新説（寝付けずに身体を横向きに臥して、外の音を聞くとともに聞いて聞いている）を提示する。また、「そばだつ」（へそばだてる）という日本語複合動詞それ自体が、「欵枕」のための漢文訓読語として成立した可能性が高いこと、その訓読表現は、（諸先行研究で『誤読』であるとされているのは当たらず）、当時の日本語として誤った訓や解釈ではなく、中国語「欵枕」を正しく解釈した上で作り出されている、訓（漢文訓読語）としてふさわしい表現であること、これを元にして日本語「耳をそばだてる」「目をそばだてる」が成立したことを論証するものである。その過程で、この「そばだつ」という語は、『源氏物語』の例が和文としては初出例と解釈できること、菅家の博士家の訓法である蓋然性、紫式部はこの「そばだつ」を菅原家（特に菅原道真の『菅家後集』）から習得して作品に使用した蓋然性が高いことを論じる。

キーワード——白居易、「欵枕」、漢文訓読語、「枕をそばだてる」、『源氏物語』、『菅家後集』、「耳をそばだてる」

【目次】 一 問題設定

- 二 「欵」の異体字とその字義について
- 三 中国での「欵枕」
 - 三―（一） 詩文と散文での偏り
 - 三―（二） 中国語「欵枕」の解釈の諸説
 - 三―（三） 中国詩における「欵枕」の意味
 - 三―（四） 中国詩における「欵枕」の史的変遷に関する二つの解釈
- 四 日本漢詩における「欵枕」と『菅家後集』
 - 四―（一） 日本漢詩における「欵枕」の受容
 - 四―（二） 『菅家後集』の「欵枕」
- 五 「枕をそばだつ」という訓
 - 五―（一） 「枕をそばだつ」の辞書での解釈
 - 五―（二） 「枕を傾ける」説への疑問（日国の語釈②および『源氏』三例の通説の問題）
 - 五―（三） 漢文訓読語のために「複合動詞」として訳出された可能性
- 六 語彙史研究からみた「そばだつ」
 - 六―（一） 「枕」の慣用句の種類——「枕」は身体メトニミー
 - 六―（二） 「そば」と「立つ」による語形成
- 七 悲哀の「欵枕」

七―(一) 白居易と道真の相違

七―(二) 紫式部が学び取り、描きたかった「欵枕」

八 仮名文学における「枕をそばだつ」

八―(一) 『源氏』で和語となった「そばだつ」

八―(二) 平安以後の「枕をそばだつ」(略述)

九 おわりに

緒言

世界文学である『源氏物語』の中の「枕をそばだてて」の解釈が、日本の高等学校の古典教科書では、憂うるべきことに、次の◎の引用のように誤ったままである。

「一人目を覚まして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに」『源氏物語』須磨

◎枕を傾けるようにして(『高等学校 古典講読』三省堂 二〇一〇年6版)

◎枕を立てて頭を持ち上げ(『精選古典』東京書籍 二〇一〇年)

◎枕を斜めに立てて(『古典 古文編』数研出版 二〇一一年)

既に二五年も前に、その典拠である「欵枕」の意味が、中国文学者・埋田重夫氏(一九八八年)によって正しく解釈されているにもかかわらず、である。紫式部が正しく描いている『源氏物語』が、修正されないまま世界に発信されている。それは、日本文学研究者の責任、というよりも、日本文学に正しい解釈のための情報を提供してこなかった日本語研究者、中でも語彙研究者の責任が大きい。本稿は、語彙史研究の視点から新解釈を提示するものである。

一 問題設定

日本の平安朝の文学に大きな影響を与えた中唐の詩人白居易。その代表作として知られる「長恨歌」に劣らず親しまれたもう一つの彼の詩がある。

香爐峰下、新卜山居、草堂初成。偶題東壁 其三（白氏文集卷第十六）

香爐峰下、新たに山居を卜し、草堂初めて成る。偶東壁に題す 其の三

日高睡足猶慵起 日高く睡り足りて猶ほ起くるに慵し、

小閣重衾不怕寒 小閣衾を重ねて寒を怕れず。

遺愛寺鐘欹枕聽 遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き、

香爐峰雪撥簾看 香爐峰の雪は簾を撥げて看る。

匡廬便是逃名地 匡廬は便ち是れ名を逃るる地、

司馬仍為送老官 司馬は仍ほ老を送るの官たり。

心泰身寧是歸處 心泰かに身寧きは是れ歸處なり、

故鄉可獨在長安 故郷可に独り長安に在るのみならんや。

〔新釈漢文大系 白氏文集（三）〕昭和六十三年 明治書院より。なお下線は引用者で以下も同様

「香炉峰の雪、いかならむ。」との問いに簾を上げることで答えた才女清少納言の逸話は夙に有名であり、その典拠である名対である。特に第二聯（傍線部）の「遺愛寺鐘欵枕聽 香爐峰雪撥簾看」は、『和漢朗詠集』（巻下・雑・山家）に引かれるなど、平安朝の人々に深く愛された。この一聯から、「遺愛寺の鐘↓枕を欵てて聴く」「香炉峰の雪↓簾を撥げて見る」との連想が平安朝の知識人たちの教養として広まっていた。

しかし、「撥」の使用が彼の新造語と指摘される「撥簾」（後述する埋田氏）の対となる「欵枕」の方の解釈には、実は「未だ定説がない」と判断される状況にあり、多くの先学により、平成に入っても繰り返し検証が行われている。

「欵枕」という語については、この白居易の詩の影響から日本文学にも用例がいくつかあるが、本稿では、その中でも用法に特徴のある『菅家後集』に一つの焦点を当てつつ、日本漢詩における「欵枕」およびその訓読語と位置づけることになる。「枕を」そぼだつ」の日本文学における解釈を、新たな角度から進めていく。さらにその過程で、「欵枕」を、初めて仮名文学に訓（訓読）「枕を欵つ」（現代語⇨欵てる）として取り入れた『源氏物語』（以下『源氏』と記す）での使われ方に、いま一つの焦点を当てて考えていくことにする。¹⁾

二 「欵」の異体字とその字義について

まず、「欵枕」の「欵」の漢字について確認しておく。この字体の校異およびそれぞれの意味の相違については既に先学の複数の検証がある。それらの異同に関しては、この詩における解釈に大きな影響が無いようであるので、

以下では基本的な問題を確認しておく程度に留める。

さて、「敲（枕）」については他に「敲」「敲」での用例があり、利用した索引（後述）では区別して用例が挙がっていた。字体による意味の違いがないか確認するため、『大漢和辞典 修訂版』（大修館書店）にて字義を調べた。以下にその記述を示す。なお、用例については省略し、また字体の差異が微細なため、見やすいよう便宜的にそれぞれA、B、Cの記号も付した。

- ・ A 【敲】 (一) ああ。歎美の辞。通じて猗に作る。(二) かたむく。そばだつ。かしぐ。敲敲に通ず。
- ・ B 【敲】 (一) ① はさむ。箸で物をつまむ。② もちさる。(二) 敲敲は、そろわないさま。
- ・ C 【敲】 (一) ① もちさる。② はさみとる。③ かたむく。伎に通じ、敲に同じ。(二) ① さる。② 平らかでない。かたむく。

C「敲」が最も多義にわたり、その意味を分け持つようにA「敲」とB「敲」があるように見える。ただし「敲・敲・敲」枕」についてはそれぞれの詩を比べても差異はなく、どれも同義として用いられているようである。ちなみに旧大系『菅家文章 菅家後集』では本文はB「敲」で表記し、頭注にあげている『白氏文集』の用例はA「敲」で表記している。恐らく『菅家後集』原文ではB「敲」の字体なのであろう。『菅家後集』の原本に当たって字体を確認すべきではあるが、現存最善本とされる前田家甲本の影印の公刊が無く、いま原本での確認がかなわなかった。漢字の相違を検討した限りでは、字体による意義の違いがそれほど問題にならないようなので、原本での確認は今後の課題とし、以下本論では別段の必要が無い限り「敲（枕）」で表記していくこととする。ただし『菅家後集』『菅家文

草』の用例については旧大系に倣いBの「欹(枕)」で表記し、また詩の掲出に当たっては利用した索引等の字体に従う。

なお、参考までに『漢語大詞典』でのA「欹」、B「欹」の意味記述を以下に示しておく。(用例は省略する。)

- ・ A「欹」…①歪斜…傾斜。②容貌憔悴。③通倚。斜倚。斜靠。
 - ・ B「欹」…同欹。①傾斜。歪斜不正。②通倚。倚靠。斜靠。
- B「欹」②の用例として「欹枕」の詩での用例が挙げられており、『漢語大詞典』では「欹枕」を「枕によりかかる、もたれる」と解しているようである。

三 中国での「欹枕」

三―(一) 詩文と散文での偏り

中国本土で「欹枕」がどれだけ使われているのか、語彙の索引システムに当たって収集してみた。用例は、一部を後に紹介する。(先行研究における中国の用法の解釈は本節後半に触れる。)

・『漢籍全文資料庫』<http://hanchi.inp.sinica.edu.tw/inp/hanji.htm> (史書や經典などの散文資料を網羅している。)

A「欹枕」二例 B「欹枕」用例なし C「欹枕」用例なし

・『全唐詩檢索系統』<http://cls.hs.yzu.edu.tw/tang/Database/index.html> (唐の時代の詩を網羅している。)

A「欹枕」十七例 B「欹枕」十九例 C「欹枕」三十六例

検索の結果から、「欹枕」はほとんど詩に偏って用いられる語であることがうかがえる。「詩語」としては用例が多

く、唐詩においてよく用いられていたことが検索結果からはうかがえる。そしてこの語が平安期の日本に広まった要因としては、先学も指摘するように、先の白居易の一首によるところが大きいと考えられる。

詩での用例については後ほど詳述するが、ここには、参考まで散文での「欵枕」の用例二例を挙げておく。なお、この散文での二例の意味は、後述していく詩での用法と比較のためにここで記しておけば、詩と類似していると判断できる。用例のある『遼史』『元史』は共に、詩語「欵枕」がよく用いられた唐詩からは時代が下った資料であり、唐詩の「欵枕」の用法から影響を受けているものと考えられる。

○『遼史』卷二十九 本紀第二十九 天祚皇帝 耶律延禧 三保大二年

處溫等相顧微笑、以寧扇亂軍心、欲殺之。淳欵枕長歎曰「彼忠臣也、焉可殺。天祚果來、

この詩で、「欵枕」して「長歎」するという、横になりつつも寝入らずにいる情景は、後述する詩の用法と重なる。次の『元史』での用例も同様である。

○『元史』卷一百八十 列傳第六十七 耶律希亮

為「忠」。希亮曰「囹圄多囚耳。」世祖方欵枕而臥、忽寤、問其故。希亮奏曰「近奉旨」

三（二） 中国語「欵枕」の解釈の諸説

「従来、『枕を欵つ』という訓については異論がなく」（松浦友久『万葉集』という名の双関語）「10 遣愛寺鐘欵枕聴」平成七年）と言われるように、日本の古典作品における「欵枕」の「訓読」部分そのものには異訓はないが（現代の視点から他の訓読の方がよりふさわしかった、等の説はあるものの）、一方、「欵枕」の意味の解釈に関しては諸説があり、大きく分けて以下の四通りがある。それぞれの解釈をとった主要な論を併せて記する。

イ 枕の端を高くする・枕を斜めに傾ける・枕を斜めにする（以下、傾枕説と呼ぶ）

工藤篁『欹枕』について『中国語学』72号 昭和三十三年

岩城秀夫「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く」『国語教育研究』第八号 昭和三十八年 ※

戸川芳郎「枕をそばだつ」解『解釈と教材の研究』8―5号 昭和三十八年 学燈社

戸川芳郎「欹枕について」補論『汲古』14号 昭和六十三年 汲古書院

川口久雄『日本古典文学大系 菅家文章 菅家後集』昭和四十一年 岩波書店

※岩城氏は、「輾転反側するときに、おのずから生ずる枕の傾斜をいうことば」と解釈する。

ロ 枕に横たわる・枕による・枕に身を横たえる（以下、依枕説と呼ぶ）（身体の向きを特定させない説）

松浦友久『万葉集』という名の双関語「10 遺愛寺鐘欹枕聴」平成七年

焼山廣志『菅原道真研究―菅家後集』全注釈（一）―平成十二年

（※埋田重夫「遺愛寺鐘欹枕聴」考『中国文学研究』十四期 昭和六十三年）

※埋田氏は単に「枕に横たわる」ではなく、より厳密に「枕に側臥する」と解釈されている。この「側

臥”については、本論ではこのロとはあえて区別して「ニ 側臥説」とし、重要な解釈として注目し

ていきたい。

ハ 枕に耳をそばだつ（身体を横たえたまま耳を澄ませて音を聞く）

参考説（埋田重夫「遺愛寺鐘欹枕聴」考」に一説として紹介されている）

ニ 枕に身を横向きにして横たわる（以下、側臥説と呼ぶ）

埋田重夫「遺愛寺鐘欹枕聴」考『中国文学研究』十四期 昭和六十三年

唐詩詩語「欹枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて（聞く）」（側臥）（安部・中山）

（※岩城秀夫「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く」『国語教育研究』第八号 昭和三十八年）

※岩城氏は、人は「左右いづれかの横向きの姿勢で臥している」としながらも、「欹枕」の語としては、「枕の傾斜をいうことば」という結論にとどまった（三一）（四）参照。

中でも、二側臥説の埋田氏の論は、「欹枕」について語義、語誌、詩情など多方面から考察をしており、傾聴すべき論と思われる。またイ傾枕説の工藤氏、岩城氏の説、ロ依枕説の松浦氏、も中国の用例に多く当たっており、いずれも考慮すべき内容が多い。以下、先学の説を踏まえつつ考察を進めていきたい。なお、「欹」の「はさむ」「よりかかる」の意から、現代人的な感覚で、「枕を脇の下にはさんで横向きに（手枕などして）横たわる」という姿勢も考えられてくるのであったが、中国・日本のいずれの用例でもそのように解される例はなく、また、いずれの先行研究においても、その解は第一義にはとっていないので、本論では言及していない。また、これらは一部を除き主に中国語「欹枕」の解釈であるが、日本語「そばだつ」の諸解釈については五章以下で改めて取り上げる。

本稿での結論をまず述べると、日本文学における「欹枕」およびその受容としての「枕を欹つ」は、横向きになって寝そべっている行為を表し、かつ多くの場合、（寝付かずに）周囲の音を聞くともなく聞いている様子を含意し、訓としては、従来通り「枕をそばだつ」が相応しいと考えられる（この「くをそばだつ」という訓で当時としても正しいと見る解釈も、本論が最初と思われる）。その論拠を以下に述べていこうと思う。

三―（三） 中国詩における「欹枕」の意味

漢語「欹枕」は本来どういった様子を示す語だったのか、まず中国詩での古い方の用例からいくつか順に検討してみたい。以下『全唐詩検索系統』から、その典型的用法と考えられたもので、比較的情景の読み取りやすいものをい

くつか取り上げて解説し、その後、先行研究における中国詩の用法に関する代表的解釈も紹介して確認することとする。なお、本節で挙げる中国詩の用例は紙幅の都合もあり、一部のものに限る。それは、先行研究と比較しても中国詩での意味解釈がほぼ一定してくること（説が分かれている部分は後述）、および、本稿での目的が日本における受容の問題にむしるあり、中国での用法の詳細な検討ではないこと、による。（中国詩史上における変遷については、後述するような史的変遷の課題があるので、機会を改めたい。）

（一）初出例 四句（埋田（二〇〇六）より）

- ① 「欵枕鴻雁高、閉関花葉森。」（李端「贈薛頂」、『全唐詩』卷二八四）
- ② 「欵枕聞鴻雁、迴燈見竹林。」（李端「宿山寺思婦」、『全唐詩』卷二八五）
- ③ 「聞蟬昼眠後、欵枕对蓬蒿。」（司空曙「閒園書事招暢当」、『全唐詩』卷二九二）
- ④ 「長簟貪欵枕、輕懶巾挂頭。」（司空曙「苦熱」、『全唐詩』卷二九三）

埋田氏は、大曆十才人に数えられる李端と司空曙のこれらの二例ずつ（いずれも対句中）を、この詩語のもっとも早い用例として挙げ、それ以降、中唐の詩人に継承され、晩唐に至っては「もはや特異な語彙ではなかったのである」とされた。（因に、李端の①②は「鴻雁」の声を聞くことを詠むが、『菅家後集』「四八〇 聞旅雁」（後掲）も「欵枕」して雁の声を聞いている。）

（二）晩秋 元稹 元氏長慶集卷一四

竹露滴寒聲 竹露寒聲滴り
離人曉思驚 離人曉思驚く
酒醒秋簟冷 酒醒めて秋簟冷やかに

風急夏衣輕 風急にして夏衣輕し

寢倦解幽夢 寢倦みて幽夢解け

慮閑添遠情 慮閑にして遠情を添う

誰憐獨欵枕 誰か憐れむ獨り枕を欵つるを

斜月透窗明 斜月窗を透して明らかなり

これは、遠く離れた人を思い、独り寝の寂しさを詠んでいる。中国詩の「欵枕」に多い悠々とした情景ではなく、悲しい思いの中で「欵枕」が用いられている。（なお、元稹（七七九—八三一）は白居易の友人であるが、岩城（一九六三）は「いづれが早く欵枕の二字を用いたかは、詳らかでないが、兩人の使用例には差異【引用者注＝意味的な】があるわけである。」と指摘されている。）

（3）病假中南亭閑望 病假中南亭にて閑望す 白居易（卷四二八）

欵枕不視事 枕を欵てて事を視ず

兩日門掩關 兩日門は掩い關せり

始知吏役身 始めて知る吏役の身

不病不得閑 病にあらざれば閑を得ず

閑意不在遠 閑意遠くに在らず

小亭方丈間 小亭 方丈の間

（略）

これは詩題にあるとおり、病のため仕事から離れ家にひきこもって静養している時の詩である。

(4) 東樓竹 東樓の竹 白居易〔卷四三四〕

瀟灑城東樓 瀟灑なり 城東の樓

繞樓多修竹 樓を繞りて 修竹多し

森然一萬竿 森然 一万竿

白粉封青玉 白粉青玉に対す

卷簾睡初覺 簾を卷きて睡は初めて覺め

敲枕看未足 枕を敲でて看れども未だ足らず

影轉色入樓 影転びて 色 楼に入り

床席生浮綠 床席 浮緑を生ず

(略)

これは白居易の詩で、窓から見える竹を、横になりながらのんびりと眺めている場面である。白居易はこのように、徒然と寝そべっている情景に「欵枕」を用いることが多い。

(5) 長興里夏日寄南鄰避暑 杜牧〔卷五二八〕

(略)

開鎖洞門遠 開き鎖じて洞門遠く

捲簾官舍涼 簾を捲きて官舎涼かなり

欄圍紅葉盛 欄囲みて紅葉盛り

架引綠蘿長 架引きて緑蘿長し

永日一欹枕 永日一たび枕を敲て

故山雲水郷 故山雲水の郷

(6) 永夜 齊己 「卷八四一」

永日還欹枕 永日還りて枕を敲て

良宵亦曲肱 良宵に亦た肱を曲ぐ

神閑無萬慮 神閑万慮無く

壁冷有殘燈 壁冷やかに残灯有り

(略)

右二首は、共通して「欹枕」に「永日」が掛かっている。その内容から、「欹枕」は枕を不安定に傾け高くして眠ろうとする様子ではなく、終日所在なくただごろごろと、時に肱を曲げて肘枕をしたりしては、寝転がる情景に近い事が確認できる。

以上の五例のように、まず、①「欹枕」とは概ね、寝転んだ状態ではありながら眠りについてはいるわけではなく、のんびり休息している様子を指す語だと考えられる。更に、②(2)「晩秋」の月や(4)「東樓竹」の竹など、寝ながらにして外の景色か何かを見ている情景が多いことから、ただ仰向けに寝ているのではなく、特に横を向いて臥せている姿を表しているようである。つまり「欹枕」の「欹」は「その傾斜する対象が実は枕ではなく人である」(埋田氏) というように、人が横向きに臥し体を立てている状態を示していると解釈されるのである。

調査した範囲では右のように解釈されたが、これらの特徴は、先行研究の中でも調査と検討が詳細である岩城氏と埋田氏の解釈する範囲を出でず、それらと照らし合わせても、大きく異ならない。次に簡略にお二人の解釈の結論を

紹介する。

三―(四) 中国詩における「欹枕」の史的変遷に関する二つの解釈(安部)

岩城秀夫氏と埋田重夫氏とに共通する重要な点は、体の姿勢はただの横臥でなく横向きつまり「側臥」であること、また、それぞれ中国詩上における「欹枕」の意味的変遷を(お二人各々多少異なる時代と観点から)具体的に跡づけている点である。引用が少し長くなるが重要な二説であるので挙げておきたい。

岩城氏は、日本国内の研究としては、おそらく最初に「側臥」であることを用例から帰納的に結論付けたものである。

「すなわち欹枕の際には、人は上向きの姿勢ではなく、左右いずれかの横向きの姿勢で臥していることになる。」
岩城氏は、この横臥姿勢を表現するのに、では「なぜ欹枕ということばをもちいるのか。」について、次のような「文学的」推定を下された。その解釈が、後続の埋田氏の解釈と大きく違う点である。即ち、次の如し。

「しかし一方で横臥の姿勢を【引用者注・床に寝た姿勢をいろいろ】変えたぐらいで、欹枕、すなわち、枕【引用者注・陶製も含む箱枕等】が傾斜するものではないという反論も予想される。確かに物理的にいえば、なにほどの傾斜もたないかもしれない。しかしその一端に頭部をのせて横向きの姿勢で臥した場合、頭部の後方にある枕の他の端が、なにがしか浮かびあがるごとく感じても不思議ではない。それを文学的に欹枕の二字で表現することも、またありえたのではなからうか。」

結論として「欹枕」は、

「眠れぬままに輾転反側するとき、おのずから生ずる枕の傾斜をいうことばとして、欹枕の二字は使用されて

いると思われる。」

とされ、最終的には「傾枕」説にやほりとどまることになった。

一方、岩城氏の説でいまひとつ重要な点は、これも管見の限りではおそらく初めて、中国での「欹枕」の使用場面に相異なる2パターンを指摘した点であろう。

2パターンとはつまり、白氏の「不精（不）の中にえられる楽しさ」（非自適）と、白氏の友人でもある同時代の元稹の「眠れぬ夜の輾転反側」である（この「眠れぬ夜の輾転反側」という解釈の方は岩城氏自身が「欹枕」の原義としたものに近い）。

① 「元稹の輾転」——「西人【引用者注：白居易と元稹】の使用例には差異があるわけである。元稹は眠れぬ夜の輾転反側を欹枕で表現したのであり、五代から宋へと、とくに、詞の分野【引用者注：「詞（詩録）」という記述もあるが、いわゆる「宋词】では元稹と同じ方向に用いた場合が多いが、」

② 「白居易の自適」——「白居易のこの詩の場合、前述のように、おそくまで熟睡した朝の、起きるのも面倒で寝そべっている作者の様子を想像するのが、正しいであろう。」

つまり、中唐の白居易・元稹のころには、二つの用法があったが、五代から宋、特に宋词においては、「眠れぬ夜の身体の輾転反側」を表現する傾向が強い詩語であった、とするものである（これを、埋田氏は「憂愁のため輾転反側する貌（さま）（悶々として寝つかれない状態）」と表現し直している）。

次に埋田氏の説を見て比較してみよう。まず、本稿に係する主要な論点を列挙する。

① 従来の語義解釈は（岩城氏も含め）いずれも「ほとんど全く成立し難い誤訳であると考えられること。」

② 「賓結構句『欹枕』は自動詞——「〜に〜する」——としての用法であり、枕辺に横臥している詩人の安眠

姿勢を示しているに過ぎない。」

③ 「それ故に、もし訓読するならば、『枕を敬(そぼだ)てる』ではなく、『枕に敬(そぼだ)つ』『枕に敬(よこた)はる』とすべきであること」(傍点原文)

④ 最も早い用例は、「李端・司空曙・楊凌などの大暦年間の詩人であり、(中略)この語彙に対する嗜好の流れは、中唐から晩唐の詩人社会に急速に拡大していき、唐代後期に至っては決して特異なことではなくなっていた」(傍線引用者)

⑤ 白居易にとって「敬枕」(枕に側臥する)(および「撥簾」(簾をさっと撥ね上げる)の2語)は、「独善・知足・安眠・安逸によって達成される身心の『現状充足』」の場を、よりよく象徴するものとして特別な意味をもっていたということ。

このように、埋田氏、岩城氏の指摘を比較して見ると、次の2点で共通する。

① 「敬枕」が使用されている場合の身体の体勢は「側臥」である(単に床に横に臥す意味での「横臥」ではない)。

② 中国詩史上、中唐において「敬枕」の使用場面にすでに二つの異なる用法——惰眠を貪る「自適」と「眠れぬ夜の身体の輻転反側」——があった。

この埋田説以後、この説は、松浦(一九九二)、後に一九九五)、中島和歌子(一九九四)、小山香織(二〇〇一)の3名によってその主要な部分は支持されており、実証的な反論はいまだない(唯一の反論である加固理一郎(一九九八)については注(2)参照)。本稿執筆者が検証する限りでも、埋田氏の解釈は、日本漢文における訓読(そぼだつ)の問題に関する部分以外は、支持されるものと決論づけられる。

一方、若干の課題も残った。特に、今後の研究課題という点では、中国詩史上における「欹枕」の用法の史的傾向の精査が残されていることが、二者の論の比較から明らかにできる。即ち、お二人の中国詩史上の解釈には若干の異なりがあり、現在のところでは、中唐から晩唐までは白居易のような「自適」「独善・自足・安眠・安逸」を象徴する使用の傾向が強く（埋田氏）、続く五代から宋においてはむしろ「眠れぬ夜の身体の輾転反側」の様を表現する傾向に変化していく（岩城氏）、という史的変遷があったことになろうか。

さて、先のように解釈された「欹枕」の意味から、「欹枕」を訓読するのであれば、「枕をそばだてる」（埋田氏）や「枕による、枕によこたわる」（埋田氏、松浦氏）、「枕に欹（ふ）して」（松浦氏）、また「枕」を寝る意でとって「欹（て）枕す」（私案。今回参照した論文にはこの訓は見られなかった）等とするのが適切ではなかったかと考えられる。ではなぜ平安の貴族たちはあえて「枕をそばだつ」と訓じたのか、その理由を考察していきたい。

四 日本漢詩における「欹枕」と『菅家後集』

四一（一） 日本漢詩における「欹枕」の受容

次に、日本漢詩での「欹枕」について見ていこうと思う。まず本稿で問題にしていく日本における漢語「欹枕」の用法を確認する。日本漢文での用例は、既に確認されているように、初出に『文華秀麗集』があり、ついで、漢詩『経国集』『菅家文章』『菅家後集』にいずれも一例ずつ用例が続く。また、動詞「欹」の初出は四に挙げる『田氏家集』とされる。

ところで、その初期の数少ない漢詩の中においても、「欹枕」の使われる場面に中国の用法の幅を投影した相違が見られる。その中においてひとり『菅家後集』では強い「悲哀」感の中で使われている。『菅家後集』のその独自性を確認するため、『文華秀麗集』『経国集』『菅家文章』を順次見ていくことにする。

□『文華秀麗集』卷上 遊覧

江頭春暁。一首。御製 江頭の春暁 一首 御製

江頭亭子人事睽 江頭の亭子人事に睽き

欹枕唯聞古戍鷄 枕を欹てて唯聞くは古戍の鷄のみ

雲氣湿衣知近岫 雲氣衣を湿らしては岫に近きことを知り

泉声驚寢覺隣溪 泉声寝ぶりを驚かしては溪に隣きことを覚ゆ

天辺孤月乘流疾 天辺の孤月流に乗りて疾く

山裏飢猿到曉啼 山裏の飢猿曉に到りて啼く

物候雖言陽和未 物候陽和未だしと言ふと雖も

汀洲春草欲萋萋 汀洲の春草萋々ならんとす

（『日本古典文学大系69懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』昭和三十九年 岩波書店）

□『経国集』卷第十三

七言。山居驟筆。一首 太上天皇

孤雲秋色暮蕭條 孤雲秋色に暮れて蕭條たり

唐詩詩語「欹枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて（聞く）」（側臥）（安部・中山）

魚鳥清機復寥寥 魚鳥清機にして復た寥寥

欹枕山風空肅殺 枕を欹てるに 山風空しく肅殺し

横琴溪月自迢遙 琴を横たへるに 溪月自ら迢遙

僻居人老文章拙 僻居の人 老いて文章拙し

幽谷年深髮髮凋 幽谷年深く髮髮凋ふ

蘿戸閑來無一事 蘿戸 閑來たりて一事無く

莫言吾侶隱須招 言ふ莫れ 吾が侶 隠れて須く招くべし

『日本古典全集 懷風藻 凌雲集 文華秀麗集 経国集 本朝麗藻』 大正十五年

『菅家文草』卷第二

一六〇 石泉。

欹枕閑窓臥 枕を欹てて閑窓に臥すとき

微声石下泉 微声あり石の下の泉

松悲无木地 松は悲しむ 木なき地

雨冷不雲天 雨は冷し 雲あらざる天

未飽残秋賞 残秋の賞に飽かず

心驚五夜眠 五夜の眠りを驚すべし

縦教聞取去 縦ひ聞ひて取り去らしむとも

那得写門前 那んぞ門前に写くこと得む

『日本古典文学大系72菅家文章 菅家後集』

参考まで次に「欵」の日本漢詩での古例を④として挙げておく。先行研究も指摘する例であるが、島田忠臣は道真の義父にあたる。ここでの「欵」は花房が斜めに垂れる様である。

④『田氏家集』卷之下 一三六

五言禁中瞿麦花詩三十韻 (抜粹)

脆軟紅蘇蒂 脆軟たる紅蘇の蒂

欵垂蠟紫房 欵垂せる蠟紫の房

半陰縈鳳署 半陰鳳署を縈り

斜景射虹梁 斜景虹梁を射る

『田氏家集全解』

まず③の、「欵枕」の日本漢詩における初出の用例、八一八(弘仁九)年成立の『文華秀麗集』「江頭春曉。一首。」を見る。この詩は『文華秀麗集』の頭を飾る嵯峨天皇の御製であり、「欵枕」という語がそうした詩に用いられるほどに広く知られていたことを示すものである。春の河のほとりののどかな情景を詠んだ叙景詩であり、ここでの「欵枕」は、白居易の詩のように漫ろに横たわる様子を表すのに使われている。また「聞古戍鶏」とあり、「寝入らずに横になる」意味にも合っている。この詩は、おそらく「欵枕」が日本漢詩に紹介されて間もない頃の詩作であり、多くの中国詩での用法「のんびりとした情景で横たわる」(自適)に倣ったものと考えられる。

次に③の八二七(天長四)年成立の『経国集』である。まず「欵枕」と「横琴」が対になっていることに注目した

い。「横琴」はおそらく琴を横たえている様子であるが、その対句として「欹枕」が用いられていることから、やはり「欹枕」は琴が横にして置かれている様に、身体を横たえている体勢を指す語であると理解できる。場面としては秋の物寂しい風情の中で、物思いに耽っている寂寥・憂愁の感が詠み込まれている。ここではのんびり・悠々とした「自適」の情感とは少し趣を異にしている。中国詩の中では元稹の例のような寂寥・憂愁を帯びた情景で詠まれていると言える。

そして③、『菅家後集』と深く関係する『菅家文章』の用例である。初句の頭に「欹枕」が出てきているが、詩の大意は閑寂な小亭の窓辺に寝ていると泉から湧き出る水音が聞こえてきて、それが耳障りで眠れないというものである。□「江頭春暁」の鶏、□「山居驟筆」の山風同様、ここでは「微声石下泉」といずれも「欹枕」することで何かしらの音を聞いており、興味深い共通点である。またこの詩では「欹枕」して耳に入ってくる泉の音について「遺愛寺鐘」のように風流ではなく、「取去」りたいとあるように、鬱陶しく感じているところが特徴的である。そして「松悲无木地 雨冷不雲天」という寂寥とした描写や「閑窓臥」の表現からもうかがえるように、悠々と寝転がって閑居を楽しむというよりは、閑寂・憂愁の感が強く表れていると感ぜられる。

ここで注目しておきたいのが初句の「欹枕閑窓臥」という表現である。先ほど三章で中国語における「欹枕」の解釈としては「身体を横向きにして寝る（但し寝入らない）」と解釈したが、「枕を立てて寝る」「枕による・よこたわる」と捉える向きもあることを示した。そこで『菅家文章』のこの詩句から、改めて道真の詩における「欹枕」の語義を確認したい。

まず注意するべきは、「欹枕」と「臥」が同時に使われている点である。ここでもし「欹枕」を単に「枕による・よこたわる」の意でとってしまうと、「枕による・よこたわる」とはすなわち臥せることになるから、「臥」と意味が

重複してしまうのではないだろうか。詩的な表現と言ってしまうばそれまでだが、「枕によこたわり臥せる」とは当たり前前にも程があるのではないだろうか。それよりも、「欹枕」を単に「臥」せるのは違った体勢を表す語として用いていると読み取る方が自然ではないか。「臥」と重ねて用いられていることからしてもやはり、「欹枕」は単純に「枕による・よこたわる」という意味ではなく、「身体を横向きにして臥する（横たわる）」という特徴的な「臥」し方を指していると解釈すべきである。

次に「閑窓臥」という情景に着目したい。窓辺に臥しているということから、おそらく仰向けに横になっているのではなく、身体を横に向けて窓の外に目を向けているのであろう。外の景色を見なければ窓辺に横になる意味がなく、「松悲无木地…」という次聯につながる。その横を向いて寝る（但し寝入らない）体勢を「欹枕」と表現していると思われるべきである。「枕を立てて高く」して窓の外を見る、と捉えることもできなくはないが、やはりここでの趣旨は枕を置く向きではなく身体の向きにあると考えられる。

以上のことから道真のこの詩においても「欹枕」は「身体を横向きにして寝る（但し寝入らない）」と解釈するべきである。

さて、話を日本漢詩での「欹枕」の使われ方に戻せば、確認できた三例は、謂わばプラスの意味の「悠々自適」「安逸」と、マイナスの意味の「寂寥」「閑寂」「憂愁」の両方の文脈に分かれていた。日本漢詩では「欹枕」が、「閑寂」「憂愁」の情景でのみ用いられる、といった偏りがあるわけではなかった。また『経国集』『菅家文章』での用例も閑寂・憂愁とした情景ではあるが、それほど深い悲しみ（悲哀）に満ちているというものではない。それらに比して、次に見る、故郷に帰る日を思量する場面で用いた『菅家後集』の用例は、最も「悲哀」の「欹枕」として印象深いものとなっている。

の、のんびりと寝転がり鐘の音を聴く場面とは異なり、謂わば「悲哀」の情の中で「欹枕」が使われている。

もちろん中国の詩にも先ほどの元稹の「晩秋」のように、寂寥感を以て「欹枕」を使っている例はある。だがそれは必ずしも多くはなく、上述のように、中国漢詩（特に唐詩）において「欹枕」は悠々と寝そべる情景、「自適」「安逸」の世界で使われるのが一般的であった（埋田氏）。「悲哀」の情景で「欹枕」を用いるのは実は多くはなく、「寂寥」感でも時代的に偏りがあることが指摘されてきた（岩城氏）。日本でも佳句としてもてはやされた「遺愛寺の鐘」の詩をはじめ、他の白居易の作品などを見ても「欹枕」は、悠々と気ままに横になる情景で詠まれることが多いのである。それゆえ、白居易の詩から強い影響を受けた道真の詩も同様に、気ままな情景で使っていることが、当然予想されるところであった。

ところが実際にはこのように、白居易の用法とは異なっているのである。この『菅家後集』に見られる「悲哀の情景で『欹枕』を用いる」という点は、後の日本文学における「欹枕（枕をそばだてる）」の持つ、独特の用法の形成に大きく関わっている可能性が高く、注目されるのである。

なお補足であるが、「欹枕」は、白居易の詩をはじめ、「聞く・聴く」動作との関係が深い。用例を確認すると「遺愛寺の鐘」の詩や『文華秀麗集』では「欹枕聴」「欹枕唯聞」の様に「聞く」動作を表す語が出てくる。それが、時代が下った『経国集』や『菅家文章』の例ではそれぞれ「山風」「微声」を聴く場面であるのに（そのこと自体は、先行研究でも指摘されているが）、音を聴く「動詞」が表現されていない。つまり、『欹枕』一語で音を聴く動作も暗に含めるようになっていった、と考えられるのである。この変化は先行研究でも看過されているが注意しておきたい。この「音を聞く」という含意と「欹枕（枕をそばだつ）」との密接なつながりは、後に音に係る成語「耳

をそばだてる」が生まれる伏線とも考えられ興味深い。

日本漢詩における、これらの受容の変奏を押さえた上で、次に、和文における日本語としての受容を見ていくことにしたい。

五 「枕をそばだつ」という訓

五―(一) 「枕をそばだつ」の辞書での解釈

中国語（漢語）「欹枕」の日本での受容を考えるにあたり着目したいのは、中国漢詩での意味の正しい解釈よりも（それももちろんあるが）、まず、日本での「欹」の訓読として当てられている「そばだつ（下二段）」（「そばだてる」）についてである。

日本の和文での初出は『源氏』三例である（後述）。それら三例とも先述の白居易「遺愛寺鐘……」の詩を下地に書かれたとされている（例えば、「すだれまきあげてみ給へばむかひのてらのかねのこゑ枕をそばたてゝけふもくれぬとかすかなるひゞきをきゝて」（総角）などで「枕を」そばだつ」と仮名書きされている）。それらなどから、古くからこの訓が「欹」に当てられたものと認められている（先掲の工藤氏の論などにも言及がある）。そうなれば当然日本では「欹」の字を、当時「既にあった」「そばだつ」という日本語の意味で解釈し用いていた、とまずは考えられてくるのも当然である。そこで「そばだつ」の意味をまず確認してみる。

そばだ・てる【**岐・欵・側**】(活用など略、「古くは」そばたつ」とある)①高くそびえたたせる。高くさし上げる。たてるようにする。*大日経義积延久承保点(1074)一〇「左手を申(そ)べて掌を側(ソハタテ)て、地水指を属する是なり」②斜めにする。傾ける。「方の端をもち上げる。斜めに突き出すようにする。横向きにする。」*源氏(1001~14頃)須磨「枕をそばたてて、四方(よも)の嵐を聞き給ふに」③(耳を)かたむける。(目を)みはる。注意力を集中させる。*金刀比羅本保元(1220頃か)中・左府御最後「寺僧等、首を低(たれ)、耳をそばたて、涙をながし」④踏みしめて立つ。また、つま先で立つ。

〔『日本国語大辞典第二版』「以降」、「日国」と略記する〕

②の用例に『源氏』須磨の巻の一節が挙がっており、日国では『源氏』における「枕をそばだつ」の「そばだつ」は、「傾ける」「一方の端を高くする」「横向きにする」という意で解釈している(後述)。

なお、『源氏』の例が年代的に最も早いにもかかわらず、①として用例年代が七十年も下る「大日経義积延久承保点」が最初に挙げられているのは、意味的に「手の平を(縦にか横向きでか?)立てた(らしい)」「大日経義积延久承保点」の例を、本来の意味と解釈したためと推察する。そこからは、日国では、本来の意味を「そば(稜・端)＋立てる」と解釈したと思われる。(なお、「大日経義积延久承保点」では、掌を縦横どちら方向に垂直に立てたのかはこの引用だけでは判然としない。例えば、**㊦**手首から先を垂直に指先が上向きになるように立てた、とも解せるが、一方、**㊦**親指を上を手刀を切るような向きにして、指先は水平向きで掌の面全体としては垂直に立てたとも解せる。どちらでも、掌の端(前者**㊦**は先端、後者**㊦**では側面)を立てたということにはなる(漢字「側」の使用から見るといか)。「訓点語と訓点資料」に卷十三の翻刻があるが卷十は未見である。)

しかし、本稿で「そばだつ」の原義を詳述していくように、この語は、日本での「欹枕」の受容以前に、「そばだつ」という語形で既に存在した単なる複合語では「なく」、本来、漢語「欹枕」を訓読するために漢文訓読の世界で新たに生み出された熟語的表現であると捉える。よって、日国の①の意味が最初の事例で②が後に意味が変化したものとする解釈は支持せず、用例の年代順通りに解釈し、②の『源氏』を本邦で最初の、本来の用例として位置づけていく。まず検討すべきは『源氏』の三例とすることに絞られる。

また、日国には「枕」の項に成語として「枕をそばだてる」の掲出があり、語誌欄には以下の記述がある。

（一）挙例の白居易の詩句が平安時代に佳句としてもはやされ、「千載佳句」「和漢朗詠集」などに採られて広まった表現。（二）「欹枕」は、もともと、枕にもたれる、枕に横たわるの意であったが、「欹」には傾ける、斜めにするの意もあり、日本では、この「欹枕」を、枕を立てて傾けるの意に解し、「枕をそばだつ」と訓じたものと思われる。ただし、挙例の「文華秀麗集」などは、本来の「枕にもたれる」の意で用いられている可能性もある。（『日国』の「枕」の項の熟語「枕をそばだてる」参照）

つまり、「枕をそばだつ」という慣用的表現としては、漢詩「欹枕」を踏まえて広がった言い方で（一）、日本での「欹枕」の解釈およびそれに当てた「枕をそばだつ」の解釈では、イ傾枕説の意味で受容して用いられているが、中国での本来の意味は口依枕説の解釈に拠るのが正しい（二）の前半）、当時の訓が不明である日本漢文の場合には、そのどちらの意味で使われているかは未詳である（二）の後半「ただし」以下）、というのがこの「枕」（「枕をそばだてる」）の項での見解となっている。

この(2)の解釈で注目しておきたいのは、中国での「欹枕」については、「枕に横たわる」と、ある程度正しく(後で確認するように)解していること、日本漢詩での初出となる『文華秀麗集』の例も「枕を傾ける」ではなく、「枕にもたれる・横たわる」という中国の詩に通じた意味で解釈し得ることを指摘している点である。(本稿では「枕に横たわる」という表現はまだ不十分で、仰向けではなく横を向く体勢を重視し、「身体を横向きにして寝る(但し寝入らない)」と詳解したいが、「枕を傾ける」ではないという点で、「枕に横たわる」という解釈も同じく評価したい。その上で『文華秀麗集』の例も「枕を傾ける」ではなく、「横向きに枕に臥して音を聞く」と解釈する)。

もし、この解釈のように、最初に受容した『文華秀麗集』の「欹枕」が、中国での用法に過たず「枕にもたれる・よこたわる」で理解し得ていたものであったなら、『白氏文集』の受容においても中国の本来の「欹枕」として正しく理解され、その訓読、つまり対訳語と見なせる「枕をそばだつ」も過たず「欹枕||枕をそばだてる||枕に横たわる」の意味をもって使用されていた蓋然性が高いことが、自ずと導き出せるはずである。この語誌欄がその余地を残している解釈は、本稿が導き出していくこのような解釈の道筋が十分にあり得ることを、図らずもその記載の行間に間接的に示しているということができよう。

確かに「そばだつ」は、その語構成から分析的に語源解釈すれば「そば(物の端・側ソバ)」を「立てる」という意味の語であり、訓読に当てられた和語をそのままの意味で捉えるかぎり、イ傾枕説の解釈が最も自然なように一見思えてくる。「そばだつ」という和語からは口依枕説のような「横たわる」「よる」という意味は読み取れない。また、ハの「枕に耳をそばだてる」という解釈については、「そばだつ」という語が耳に特化して用いられるようになった後世の「耳をそばだつ」の語感から生まれた拡大解釈であろう。このように、「そば+立つ」という訓を当てている以上、日本での「欹枕」はイ傾枕説の枕の端を高くする・枕を傾けるの意味で解釈するのが、一見すると素直なよう

に感じられてくるのだが、果たしてこの語構成からは、その解釈しか導けないのだろうか。次節以降で検討していくことにする。（なお、「そばだつ」の、後述する本義と関わるので、ここに補筆しておけば、先ほどの「大日経義釈延久承保点」の㊦・㊧の手の向きは共に、提示する新解釈で解釈可能なものである。）

五―(二) 「枕を傾ける」説への疑問（日国の語釈②および『源氏』3例の通説の問題）

さて、日本において、最も古く現れている『源氏』の例とその解釈（日国の②、なお注釈書及び現行の高校の古典の教科書のほとんどがこの解釈をとる）を見ていくことにする。

まず『源氏』の典故となっている中国語「欹枕」について改めて確認すれば、工藤篁氏は先掲の論文で「枕を直立してのちそれを傾斜し、高枕を求めるのである。さらに上半身を起し、小脇に挟むことによって、半身を支える形にまで進展する可能性がある。」と分析している。これに対し埋田氏は中国での用例に「欹枕」を安眠時の体勢に用いる例があることから「高枕」の一つと捉える本説は、それがはたして長時間にわたる安眠の姿勢となり得るかという点で、大きな疑問を残している」と指摘する。松浦氏も同様に中国の詩を引いて否定し、その上で両氏とも「枕をそばだつ」の訓は改め、単に「枕による」などと訓み変えるべきと述べる（訓み変える必要がないことは後述する）。埋田・松浦両氏の指摘はもつともであり、当時の陶製あるいは木製の硬い枕を傾けているという体勢は不安定に感じられる。例えば「遺愛寺鐘…」のゆったり鐘の音を聴く情景にも合うとはとても言い得ない。

それらを受けて岩城氏は「そばだつ」を積極的行為とは捉えず、横向きになって枕に臥した際に感じられる「頭部の後方にある枕の他の端が、なにながしか浮かびあがる」感覚を表現したもの、との解釈を提示している。横向きに臥せることを文学的に「欹枕（まくらをそばだてる）」（下線引用者）と言ったのであろう、というわけである。「そば

だつ」を枕そのものを傾けようとする直接的な意味で捉えるのではなく、間接的な表現とすることで中国での詩意にも合い、訓も変えずにすむことができる。(その点でこの岩城氏の解釈は、他の解釈に残る疑問や矛盾点を止揚しようとしており注目される。「枕の他の端が、なにがしか浮かびあがる」かどうかの点はいま置くとして、本論での以下の検証においても、「欹枕(まくらをそばだつ)」を、横になる体勢を「枕」で以て表した一種の文学的修辭表現と見るのがより妥当であることを明らかにしていく。)

そこで本論は「枕をそばだつ」という訓み(和語の引き当て)について、「枕を傾ける」と『語源俗解』するのでなく、一塊の『訓読和語』として捉え、その意味解釈を改めて行ってみたい。では日本では、その訓「枕をそばだつ」を本来どういった文脈で用いていたのか、『源氏』中の用例をまず確認してみたい。なお日国によれば、この『源氏』が、動詞「そばだつ」、更に熟語「枕をそばだつ」の初出例とされている(さらに「須磨」が最初の使用であることに注意しておきたい)。

○御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、ひとり目をさまして枕をそばだてて四方の嵐を聞き給に、波たゞこゝもとに立ちくる心ちして、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりにけり。「須磨」

○をもくわづらひたる人は、をのづから髪鬚も乱れ、ものむつかしきけはひも添ふわざなるを、瘦せさらばいたるしも、いよいよ白うあてなるさまして、枕をそばだててものなど聞こえ給けはひ、いとよはげに息も絶えつゝあはれげなり。「柏木」

○雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめ暮らして、世の人のすさまじきことに言ふなる師走の月夜のくもりなくさし出でたるを、簾巻き上げて見給へば、向かひの寺の鐘の声、枕をそばだてて、けふも暮れぬとかすかなる響き

を聞きて、

をくれじと空行月をしたふかなつるにすむべきこの世ならねば「総角」

（『新日本古典文学大系 源氏物語』）

三例とも、床に臥して寝付かずに何かをしている様子が共通している。須磨の例では嵐の音を聞きながら憂えており、柏木の例は病床にある柏木が臥したまま言葉を発する場面である。総角の例では特に「遺愛寺鐘……」の詩を意識しており、鐘の音を聞きながらもの思いに耽っている情景である。悠悠自適に鐘の音を聴く白居易の詩と違い、鐘の音を悲哀の情に重なる描写が日本的とも言える。

なお、この三箇所「枕をそばだつ」は新大系によると次のように注解されている。

須磨：枕を立てて頭をもたげて。（略）その実態は、源氏物語絵巻・柏木が描く。【補注Ⅰ】

柏木：枕を縦にして。

総角：「遺愛寺の鐘は（略）」による。

以上のように、『源氏』の「枕をそばだつ」は一般に枕自体を傾けるイ傾枕説で解釈されているようである。しかし、いずれの用例も安眠とまではないかなくともある程度長時間にわたって「枕をそばだて」ている情景であり、「枕を傾げる」という不安定な体勢を表す解釈は、中国の詩と同様に、日本の仮名文学においても適切とは言えないようである。つまり、「枕をそばだつ」という訓そのものが、『枕を傾げる』意味とは解しがたい」ということである。しかも、いずれの場面も漢詩での「欹枕」の情景を強く意識したものであるから、これを単に「枕をそばだてる」という純粹な和語による和文的表現として捉えることは、適切ではないであろう。ではどう解釈すべきである

うか。

五―(三) 漢文訓読語のために「複合動詞」として訳出された可能性

まず指摘しておきたいのが、「そばだつ」という複合動詞そのものが、漢文訓読のために造られた漢文訓読語、つまり、翻訳語なのではないかという点である。根拠は次の6点。

- ① 『源氏』の3例が初出であること、
 - ② 3例とも白居易(「枕を欷てて聴く」が典拠と解せること(諸注釈書は3例全ての典拠に白居易を指摘)、
 - ③ そのいずれも「枕を」と共起していること(中山)、
 - ④ 『源氏』は「枕をそばだてて」の後に、何らかの音声に関わる動作(聞くか発する)が用いられていて、他の漢詩にもある特徴的文脈(中国・日本いずれでも音を聴く場面が多い)を踏まえていると考えられること(日国
- の①の初出例『大日経義釈延久承保点(1074)』にはその特徴はない)(中山)、
- ⑤ 「そば」(語源を「稜」のほかに「側」や「角」も考慮に入れても)との「複合動詞」は、『源氏』のこの「そばだつ」が最初であり、漢語「欷枕」を契機として初めて複合語として造語された可能性をうかがわせること(唯一「側」の方の複合動詞「側(そば)寄す」(傍らに身を寄せる)が同年代の『枕草子』に初出としてあるのみ)(安部)、
- ⑥ 『源氏』における漢文の訓読は博士家菅原家の訓法に拠るとされているが(小林芳規氏)、その菅原家である菅原道真の漢詩にも「欷枕」を含め白氏の影響が極めて強いことが指摘されていること(藤原克己・鄭虹ほか参照)(安部)、

⑦『源氏』以前の古い訓点資料での「そばだつ」の実例は、九五〇年代の1例しかいまだ確認できておらず、他は一〇一〇年以降に集中する。一方、八一八年の『文華秀麗集』、八二七年の『経国集』、九〇〇年の『菅家文章』、九〇三年の『菅家後集』等の当該訓については、平安期の訓は今回確認できなかったが、異説が伝わっていないところから見て、ソバダツの訓が早く定着していたことをうかがわせる。

（因みに、築島裕博士の『訓点語彙集成』で「ソバダツ」（四段と下二段共に）を見ると、一〇〇〇年以前の例は、唯一、九五〇年代の一例のみであった。（5015資料（09505015）の「隅ソバダテル」〔訓点語彙集成〕では「聚隅也（ソバダテル）」とある。これは中田祝夫（1954）『古点本の国語学的研究 訳文篇』「法華經玄贊卷六」の127行目、写真版では小さいので判然としない。それに次ぐ例は、「101010年（1010002-40）」＝「側ソハタテ」まで降り、興味深いことに、それ以降に用例が増加していく。因みに、「稜」を「ソバ」と訓じている例はかなり降って、「1113年（1130005-83オ）」の資料である。なお、白楽天の「香爐峰下」を訓読した平安期の訓点資料は伝わっていないようであった。右記の日本漢詩における平安期の訓は、今回は遑れず厳密には未詳という段階であるが、ソバダツの訓が、早く定着していたかと推定している。）

以上7点である。①②の事実自体は既に先行研究で指摘されていることであるが、③④の特徴は看過されてきており、⑤⑥⑦は、「そばだつ」との関係としては、ここで新たに指摘する重要な点である。

「そばだつ」という動詞自体『源氏』が和文での初出であり、そのいずれもが「枕」を受けて用いられていることから、「そばだつ」という動詞もまた「欹枕」のために造られた漢文訓読語であったと推定される（複合動詞「そばだつ」そのものを——「欹枕」の受容以前には複合語としては無かった——「漢文訓読語」として位置づけるのは管

見の限り、本稿が最初と思われる（注（3）参照）。

——また、この事例は、漢語・漢文の訓読のために、たとえ一文字の漢字「欵」であっても（夙に指摘されるような「二文字漢語熟語の訓読」による複合化現象でなくとも）、訓読するという作業が、和語にはまだ少なかつた複合語（複合動詞）が形成されるきっかけとなったことを示す事例として、貴重な語例と思われる（安部）。

つまり『源氏』以前に漢詩訓読の世界において「欵枕」の訓読語として存在していた「枕をそばだつ」という語を、漢字に秀でた紫式部が——おそらくは菅原家のいづれかから白氏の漢詩の訓として学び取って——、初めて仮名文学の『源氏』に取り上げ、それが初出の用例として残ったと推定されるのである。また、『源氏』で用いられたことは「枕をそばだつ」という日本語をより定着させ、それゆえに、さらに和語の表現として「耳をそばだつ」などに発展していく端緒となったのであろう。

確かに、当時、横向きになって寝そべる「欵枕」の意義に合致する適当な和語は他に思い当たらない（注4、なお、やや後の院政期の『今昔物語集』になると次のような同義の表現も現れるようになる。「喬様（そばさま）ニ臥シテ」（新大系本の脚注は「横向きに寝て」）。「枕に横になる」「枕による」「枕に寝そべる」などの語では単なる仰向けの状態もあり得るので、誤りとまでは言えないが「欵枕」の語感を十分に表せていない。おそらく当時の日本の知識人たちは「欵枕」の意を正確に把握しながら、この漢語をどう訓じようか思い悩んだはずである。そこで生み出された訓が「枕をそばだつ」だったのでないだろうか。つまり「枕をそばだつ」は「欵枕」に対応する一塊（かたまり）の語とみなせる。それを、純粹な和語と見て、分析的に「稜・立つ」（角を・立てる）ととらえ、「枕の角を立てる」「つまり「傾ける」と解釈するのは適当でないだろう。そもそも「そばだつ」傾ける」という意味での動詞そのものが

受容当時、まだ独立しては存在しないのである。「枕をそばだつ」はあくまで一つの漢文訓読語であって、「欹枕」は横向きになって寝る（側臥）＝「枕をそばだつ」という認識の下で、作られ用いられていたはずである。

では、なぜ問題の「枕をそばだつ」という「格」での訓に落ち着いたのだろうか。

「横向きで寝る」という意義が分かっていたのなら、先に提示した「枕にそばだつ」や「そばだてて枕す」などの訓じ方でもよかったのではないか。しかし、ここで留意しなければならないのが「枕をそばだつ」が漢文訓読語だという点である。「訓読漢詩」（松浦氏）は「たんに原詩解釈のための便法や補助手段ではなく、実質的には、日本詩歌史における『文語自由詩』として」（松浦氏）位置づけられるものであり、訓読には意義に沿うのと同様に漢詩の魅力を損なわないリズムが求められる。訓読語は意義とリズム双方のバランスを考えて作られるのである。今回の「枕をそばだつ」についてその訓読の元になった白居易の「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看」の訓としては、「枕を敬てて」と「簾を撥げて」が対応している。原詩の対をそのまま生かした名訓と言えるだろう。「枕にそばだてて」や「そばだてて枕して」では原詩の対の味、リズムを生かすことができない。意味にのみ忠実になるのではなく、訓読したときのリズムも鑑みた結果「枕をそばだつ」という訓に落ち着いたのである。（それゆえ、いくつかの先行研究が主張するような「枕にそばだつ」「枕による」等の「に格」での訓が相応しいかどうかは疑問である。）

だが果たしてそれだけであろうか。いな、むしろ、既に先行研究のいくつかでも指摘されているこの「対句構文」という理由以外のことの方が、そこではより重要だったことが、以下のような語彙史研究の観点から、新たに指摘できる。

六 語彙史研究からみた「そばだつ」

六―(一)「枕」の慣用句の種類――「枕」は身体メトニミー(安部)

「枕をそばだつ」の訓の成立には、その対句構文という理由以外のことの方が、より重要だった。なぜなら、次のように、構文的にも意味的にも、当時の日本語としては、「を格」を取った「枕」による表現こそが「側臥の体の姿勢」を表現するにふさわしかったことが導き出せるからである。それら、これまで看過されてきた観点をここに報告したい。

まず第一に、従来の研究では、当時存在した「枕」をめぐる次のような慣用句の種類がまったく考慮されてきていない。

ア「枕動く」(輾転反側する様子)――初出『万葉』|| 日国による。

イ「枕定む(下二段|| 定める)」「(寝る時、頭にする方向を定める。)」――初出『古今和歌集』10世紀初(「を」を使う例は未見) || 日国による。

ウ「枕交わす」(男女が同衾する。情交する。)|――初出『拾遺和歌集』11世紀極初(「を」を使う例は近世) || 日国による。

やや後の平安後期の例でも次のものがある。

エ「枕(を)並べる」(同衾する)――初出『平家』(「を」の無い例なら『山家集』12世紀後半) || 日国による。

これらに共通する特徴は、「枕」を表層上の目的語として使用しつつ、次のように、「枕」で身体を象徴させている点

である。

I 「枕」そのものの動きも意味的に確かに含んではいるが、むしろ、身体の動作や体勢を表現していると解せること——アは寝返り、イは枕の位置というより体そのものの向きを定めること、ウは枕の交換というより正に肉体を交えること、エは枕というより身体を同じ蒲団に並べること。

II 「枕」を使った慣用句は格助詞「を」を取るのが基本的ボタンであること（あるいは「を」は表われていない場合でも「枕」が対象格（目的格）であること）——ウ・エは、枕が格助詞「を」を取り、その初期の格助詞が明示的でない例（ウ・エ）でも「枕」は対象格として位置づけられる（イも格助詞「を」はないが枕が対象格で「枕を定める」の意）。

I からは「枕」が身体を表象していることがわかる。つまり、「体が動く」「体（の向き）を定める」「身を交わす」「体を並べる」の意味であることは明らかである。「身を」では直接に過ぎるために「枕」を換喩（メトニミー）として使用した転義法、修辞になっている。つまり、「枕をそばだつ」は、その当初から「体をそばだつ」ことを表し得る表現だったと解するのが正しい。

II ウ・エ（イ）以外にも、これら「枕の慣用句」は、後代のものを含め、基本的に「枕」が対象格であるか格助詞「を」を取るものが多い。上記以外の平安・鎌倉期の例には、さらに次のものがある（いま「身体」とは無関係のものも挙げる）。

オ 「枕を傾げる」（枕を寝る形に整える）——『仏法夢物語』13世紀後半

カ 「枕を高くする」（安心して寝る）——『太平記』14世紀後半

中世以前の「枕慣用句」では、属格「の」、並列格「と」以外の格助詞は、この「を」しかない（日国による）。こ

れらからは、中国漢詩で側臥を意味した「欹枕」を、当時の和語の表現として、側臥する身体の動き・状態として訓じようとすれば、「枕」の部分は、「体をく」の意味を含意できる「枕(を)く」とそのまま訓じる必要がある、かつ、それ以外の選択肢がなかった、ということがわかる。そのように見れば、対句表現として合わせたからということもあるが、実際には、「を」格以外の選択肢は当時はあり得なかった。結果として対句にふさわしい選択肢しかなかった、ということが明らかである。

六―(二)「そば」と「立つ」による語形成(安部)

次に、では、「欹」に対しては、「そば」と「立つ」とを結合させたことは、どのような当時の語形成意識による造語と解釈できるであろうか。

この「そばだつ」の成立には少しく紙幅を必要とするのであるが、先行研究とは大きく異なる本稿での重要な論点は、上記六―(一)までの部分にはばききであるので、和語「側立つ」の語形成についての詳細は別稿に委ね(安部)、ここではご納得いただきやすい結論部分を記しておくに留める。

従来の「くをそばだつ」の解釈が、いくつもの誤解から抜け出せなかったのは、それぞれ以下のような理由によるう。

A 【中国語に引き付け過ぎたための陥穽】先行研究では、漢字「欹」の中国語のいくつかの意味「寄せる」「傾ける」「斜めにする」から「そばだつ」の解釈を進めることとなった。即ち、「枕(に頭)を寄せる＝横臥する」「枕を傾ける・斜めにする」「頭を(枕から少し上げて)斜めにもたれる」。しかし、そのため、「そば・立つ」自体の検討が不十分なままとなった。

B 【文学中心の研究であったため、和語「そば」「たつ」の解釈が不十分】これまで中国文学・漢文学・日本文学の文学研究者によって（のみ）解釈がなされてきた。そのこともあり、和語「そば」に関する日本語学的な調査と考察が不十分なままであった。そのため、それらでは、「耳をそばだてる」による誤解（初期の研究）、「稜（そば）」（＝角と解して）と解し枕の角を立てるなどして枕を斜めにしたとする解釈、「側・立てる」と解しながらも中国語「欹」の自説に沿わせての解釈、などに結果として留まった。

C 【表現全体として、類例のある熟語的表現と見る語彙研究的視点の欠如】

「側・立てる」とまでは解釈するが、表面上の「枕を」の意味から抜け出せず、あくまで「枕」＝箱枕類の角か側面（脇の部分）を立て、斜めにしたり、あるいは、（安眠しやすいように？）高さが出るように縦長に立てた（そこに頭を載せた）と解し、あくまで、枕の立て方に拘泥した。結果として、「枕を」という慣用句としての検討が見落とされた。

しかし、Bのうち、「耳をそばだてる」は後代の表現であり、「稜（そば）」（＝角）の確例は後代の『名義抄』であるから、それらからする解釈は該当しないのである。

結論として記せば、ソバは「側＝側面・横側」の意味であり、語源としては「ソ（背）十ハ（端・辺）」と解釈される。そのソは、セ（背）の被覆形（ソビラ背平などのソ）で、ソの露出形であるセは「山の背（尾根・稜線）」の意味である。それゆえ、「背（の）端^ハ」は即ち、例えば次のように解せるところとなる。

- 山で言えば稜線の両側や山の尾根（＝山の背）下の傾斜のある（険しい）山懐、
- 衣類で言えば折り目の線の両側側面（例えば、袴の折り目（＝背）の線の両脇）、
- 木の実・果実・野菜の類で言えば、凸状の稜線や筋（＝背にあたる部分）があり（あるために）、角々しい

側面（即ちソバ）が目立つ物（「蕎麦（の実）」「そば瓜（キュウリの一種の古名）」「そばぐり・そばぐるみ（共に、実に稜線があって角ばっているブナ（の種）」）【補注2】、

○方向方角に関して言えば、側面や隣側、わきの方、横向き（「そばさま」）、

○視線で言えば黒目を横方向に向けて見ることないし横（わき）から見ること（「そば目」）、

○身体で言えば「背（背中）の端側（側面・横側）」、すなわち体の脇や横面の部分、

つまり、「枕をそばだつ」は、枕が身体の換喻（メトニミー）であることから解すれば、「体の脇を床面にして身体を横向きに立てること、すなわち、横側を立てた状態にすること」（側臥）と、文字通りに解することができる。がわかる。

このように和語そのものから解釈した「そばだつ」の意味は、埋田氏が中国詩の「欹枕」から帰納的に解釈した「側臥」の姿勢と完全に一致するものである。それは、「枕」そのものの「側面を立て」（高くし）、そして体を横向きにしたというように、「枕も同時に横置きにした」ことを含むと解したとしても、同じである。なぜなら先に見たように、「枕をそばだつ」の重要な点は枕にあるのではなく、身体の方にあるのだから。用例の「欹枕」も訓読の「枕をそばだつ」も、また、漢詩中においても『源氏』でも、ただ単に枕の置き方のみを表現したのではなく、身体の横になった時の側臥の体勢を表現したものであることには変わりないのだから。

このように、「枕をそばだつ」は、先述の「枕を」の解釈も踏まえて表現すれば、（枕の側面を立てる等を行って、あるいは、行わなくても）「体の脇の側を下にして横向きになった体勢で横になる（側臥）」行為を表し得る和語として、造語されたものと解釈される。このように見てくる時、我々は、「枕をそばだつ」という訓は、決して中国語の誤訳でも誤訓でもなく、また、格助詞を「に」とすべきところを誤ったものでもない、ということを知ることになる。

重ねて強調しておきたい重要な点は、この翻訳のための造語が、当時あった二つの和語（側、立つ）を使いつつも、中国語「欹枕」の意味（理田説）に極めて忠実に、かつ正確に、見事に成し遂げられている、という点である。訓詁という営みは、外国語を自国文化に根付かせるためではあるが、なんと高度に精緻な知的営みであったことだろう。

以上のように、「枕」は、「枕を並べる」といった古い慣用句もあるように、寝床での体勢・動作を表す際、身体の比喩として用いられることがあり、「枕をそばだつ」もその類として理解すべきものであった。日本漢詩さらには唐の詩に対する「枕をそばだつ」という訓は、当時として適切なものであり、意味は漢語「欹枕」にまったく違わず、「身体を横向きして横になって休む＝側臥する（但し寝つかない）」であるという結論に達することができた。

現代人してみれば、「枕をそばだつ」と聞くとどうしても枕そのものを対象とした何らかの動作に関心が向いてしまうのは、枕に関する慣用句をあまり用いなくなっている以上、いたしかたない。しかし、そうした慣用句が生きて使われていた当時の人々であれば、翻訳語であるこの漢文訓詁語をたとえ初めて見たとしても、それが横臥時の枕をめぐる「身体、動き・身体の体勢」の表現であろうことは、容易に読み取れたことであろう。

七 悲哀の「欹枕」

七―（一）白居易と道真の相違（中山）

では次に、「欹枕」の用いられる詩的情景について、詳しく考察していきたい。

先に述べたように、日本漢詩で『菅家後集』以前に確認できた三例は悠々・寂寥のプラス・マイナス両方の文脈に

分かれており、寂寥の情景でのみ用いられる、といった特色があるわけではなかった。『経国集』『菅家文章』においても、それほど悲しみに満ちているというわけではなかった。一方、故郷に帰る日を思量する場面で用いた『菅家後集』の用例が最も「悲哀」の「欵枕」として印象深いものだった。

先ほど「枕をそばだつ」の訓の初出の用例として『源氏』中の三例を挙げ、それらが白居易の「香爐峰下、新卜山居、草堂初成。偶題東壁 其三」いわゆる「遺愛寺鐘」の詩を典拠としていると述べた。しかも先掲の通り三例とも「溟落つ」（須磨）、「息も絶えつゝあはれげなり」（柏木）、「つるにすむべきこの世ならねば」（総角）といった、きわめて悲痛な場面で「枕をそばだつ」が使われていた。

しかし、何度も言うが白居易の「遺愛寺鐘」の詩は、新しい山居での悠々自適の暮らしぶりを詠んだもので、のんびりした姿を表すために「欵枕」の語は用いられている。この「欵枕（枕をそばだつ）」の使い方の違いはどうして生まれたのか。紫式部が「遺愛寺鐘」の詩意を正しく理解していなかったのか。否、紫式部の学識からみて否であろう。おそらく紫式部が「欵枕（枕をそばだつ）」という語を『源氏』に用いるに当たって、「遺愛寺鐘」の詩に並ぶもう一つの典拠があったのではないか。それが、『菅家後集』の詩ではないかと思ふのである。

白居易の「遺愛寺鐘」の詩は当時から人口に膾炙しており、その詩意もおそらく正しく伝わっていたはずである（『文華秀麗集』参照）。そうした詩の中の「欵枕（枕をそばだつ）」という語を、悲哀の情景で用いるものと印象づけたのは、先に見た、他ならぬ道真の詩だったのではないだろうか。道真もまた白居易の詩を好み、それに拠った作品を多く残しており、その中国語・漢文の理解能力は、極めて高かったことが多く指摘されている（谷口孝介・埋田重夫・藤原克己・菅野禮行ほか参照）。しかし、ただ単に白居易の真似をしたような内容のみではない。「対自的存在としての『白氏文集』」を必要としていた（谷口孝介『菅家後集』と『白氏文集』と）平成十六年）との指摘があるよ

うに、同じ語句、詩題でもあえて白居易の原詩を捻った詩を多く詠んでいるのである。一つ例を挙げる。

四七八 不出門。七言。

一從謫落在柴荆 一たび謫落せられて柴荆に在りてより

万死兢兢跼踏情 万死兢兢たり 跼踏の情

都府樓纒看瓦色 都府の楼には纒に瓦の色を看る

觀音寺只聽鐘聲 觀音寺にはただ鐘の声をのみ聴く

（略）

此地雖身無檢繫 此地は身の檢繫せらるることなくとも

何為寸步出門行 何為れぞ 寸歩も門を出でて行かむ

第二聯（傍線部）が『和漢朗詠集』巻下「閑居」などに収載された道真の名吟であり、外に出る気力さえ起きない謫居の暮らしを詠んでいる。この「不出門」と同題の詩が『白氏文集』にもあるのだが、そちらは家に引きこもってのんびりする楽しみを詠んだものである。こうした白居易の詩を素材として、それを、あえてそれとは異なった内容で詠んだ詩が多いのである。

白居易の詩を基にあえてそれと対照的な意味の詩を作ることが道真の一つの楽しみだったのだろうか。そのことはおくとしても、それを読む側にとっても、白居易の詩を連想させつつ独自の思いが込められた道真の詩は、深く心に残ったはずである。

ところで、中国詩の歴史における「欹枕」の意味用法の変遷を見たところでも触れたように、中国においても「欹枕」の使い方は二つの面があった。白楽天の用法は、その一方の「自適」の用法を代表するもので、それは『文華秀麗集』（「人事にそむき」）に受容されていると解せるもので、中国に例のある用法の一つであった。一方、『経国集』『菅家文章』にはもう一方の閑寂・憂愁を読み取れるものの、深い悲しみ（悲哀）に満ちているというものではなかった。ところが『源氏』に描かれた「枕をそばだてて」いる場面での強い悲哀感とは、『菅家後集』にしかないものであった。なぜだろうか。

七―(二) 紫式部が学び取り、描きたかった「欹枕」（安部）

紫式部が『白氏文集』の「欹枕」をどのようにして習得したかは、必ずしも明らかでない。しかし、『源氏』で引用される漢文訓読表現が、菅原家の訓法に依っていることは夙に小林芳規氏のご指摘がある（小林芳規（1953・1966・1980））。道真の「欹枕」の訓と意味的解釈と、菅家のそれとが全く異なったり無関係であったとは考え難い。菅原道真の解釈が、直接的な間接に、あるいは、菅家の解釈の一面として、紫式部の訓みに影響を与えた蓋然性は低くないであろう。しかし、それだけだろうか。『源氏』の「枕をそばだつ」の強い悲哀感が、『菅家後集』にしかないのは、なぜか。

それは、「枕をそばだてて」と描かれる最初の使用場面である「須磨」の巻自体が、小山香織氏がいみじくも詳述しているように、「流謫の人としての道真を、源氏に重ねあわせていくような表現」に作りあげられているからではないだろうか。「須磨」は、小山氏以前から指摘されているように、『白氏文集』『菅家文章』『菅家後集』からの引用

が全編に亘って、二重写しのように引き敷かれている。共通するのは、左遷と流謫の系譜、白樂天―道真―光源氏の3人である。

『源氏物語』における「枕をそばだてて」ということばは、具体的にどのような動作を示しているのかということ以上に、須磨巻では、流謫の人としての白氏と源氏とを想起させることばとなっている（小山香織二〇〇五）
我々はここに、道真の名を加えておかなければならない。

一方、小山氏は『文章』と『後集』の「敬枕」の質の相違までは比較していない。紫式部が、その須磨に和文として「枕をそばだてて」を組み込むにおいては、同じ「敬枕」であっても、「閑寂」の『菅家文章』『石泉』の「枕を敲てて閑窓に臥すとき」などでは当然なく、「流謫」を詠んだ『菅家後集』『聞旅雁』の「枕を敲てて帰りに去らむ日^{を思ひ量らふに}」我は何れの歳とか知らむ 汝は明春」とある強い「悲哀」の「敬枕」こそ、ふさわしかった。紫式部は、中国詩史上の用法の「敬枕」でも、また『菅家文章』でもなく、同じ道真でも、『菅家後集』の「敬枕」に「道真自ら詠み込んだ」詩情をこそ、自作の和文の（特に須磨の）「枕をそばだつ」として詠みこみたかったのだ。それが、『源氏』での用法が唯一『菅家後集』とのみ共通している理由と考えられる。

道真のこの『菅家後集』の詩を介して、強い悲哀感を伴って日本文学に浸透していく漢詩表現の本邦での独自の展開は、唐詩という枠を超え、『源氏』など後世の仮名文学に、意味や用法の変奏を経つつ、とけ込んでいくのである。「敬枕」も、そのような詩語受容の一例を示している。

八 仮名文学における「枕をそばだつ」

八―(一) 『源氏』で和語となった「そばだつ」

先述の通り、「欵枕」を「枕をそばだつ」として仮名文学で初めて用いたのは紫式部である。ただその訓も彼女が独自に生み出したのではなく、以前より「遺愛寺鐘」の詩や『菅家後集』ほかの日本漢詩で用いられていた訓読を仮名で表し、それが初出として残ったと考えるべきであろう。

つまり、それまで漢文訓読に限定され表立って表記されてこなかった「枕をそばだつ」という「欵枕」の翻訳語を、初めてあたかも生粋の和語のように、紫式部は『源氏』中で用いたのである。式部は作中で三度もこの語を用いており、そこには漢学の才を銜う意図があったかもしれない。あるいはまた、「遺愛寺鐘欵枕聽」の対の「香爐峰雪撥簾看」を『枕草子』で取り上げた清少納言への対抗心があったのかもしれない(注5)。しかし、「ひとり目をさまして枕をそばだてて四方の嵐を聞き給に、波たゞこゝもとに立ちくる心ちして(須磨)」という描写のように、「枕をそばだつ」という漢文訓読語を、実に自然に仮名表現としてとけ込ませている点は見事である。それは『文華秀麗集』から『菅家後集』に至る日本漢詩の下地があってこそ生み出された表現なのだとも考えられる。そしてこの用例が、「そばだつ」という語が和語表現として広まっていく嚆矢になるのである。

八―(二) 平安以後の「枕をそばだつ」(略述)

平安以降の「枕をそばだつ」の用例としては、まず『太平記』の二例が挙げられる。

○ 卷第四 備後三郎高德事付呉越軍事（抜粹）

泪ノ雨トナリ、虚シキ床ニ独リネテ、夢ニモ責テ逢見バヤト欵枕臥玉ヘバ

○ 卷第五 大塔宮熊野落事

絶テ人里モ無リケレバ、或ハ高峯ノ雲ニ枕ヲ欵テ苔ノ筵ニ袖ヲ敷キ、或ハ岩漏水ニ渴ヲ忍ンデ朽タル橋ニ肝ヲ消ス。

（いずれも『日本古典文学大系34 太平記一』）

卷第四の場面は越王勾踐の挿話で、勾踐が西施を呉王に献ずる悲しみを表したところである。卷第五は小題のとおり、熊野落ちする大塔宮の寂しい道中を描いた場面である。いずれの情景も悠々と寝そべる雰囲気には程遠く、日本の「欵枕（枕をそばだつ）」が、切ない思い（悲哀）のなか、横になる描写の言葉として深く浸透していたことが窺える。白居易の「遺愛寺鐘」での用例とは異なる「欵枕（枕をそばだつ）」像が日本文学で確立されていたようである。

その後「枕をそばだつ」という成語は徐々に用いられなくなっていき、「そばだつ」という動詞は独立し、後に「耳をそばだてる」という成語になっていく。「耳をそばだつ」については「耳の端（そば）を立てる」という解釈をとりやすいが、「欵枕（枕をそばだつ）」の下地があると考えれば、「遺愛寺鐘」や「四方の嵐」（源氏）の音を枕をそばだてて聴くことの連想から、「そばだつ」が音を聴く動作として認識されて耳と結びつき、それが、音のする方向へ耳殻を向けるような意識で「そば立てる」が受け取られて、「耳をそばだつ」を生み出すことになったと推定され

る。近世の読本に最初の用例が現れる「目をそばだてる」（目をそばめる・目をみはるの意）も、聴覚の「耳」から「そばだつ」を介しながら、同様にして（また「目をそばめる」（続日本紀）を下地にしながら）視覚の「目」の慣用語を生み出したものであろう。

いづれにせよ、漢語「欹枕」のための訓読語にすぎなかった「枕をそばだつ」が、紫式部が『源氏物語』で使ったことよって、いかに見事に日本文学と日本語の世界にとけ込んでいったかを窺い知ることが出来る。

九 おわりに

日本漢詩は時に、単なる中国漢詩の真似事であり、日本人の心を上手く表せず和歌に取って代わられた、という評価を下されることがある。しかしそれは一面的な認識であり、表現には漢語を用いるが、それを日本的な感覚・リズムに合うように使い方を工夫して詩に詠みこんでいるのである。そうして用いられた語はそのまま漢語として、もしくは訓読されてあたかも生粋の和語のように日本の文学にとけ込んでいったのである。

別の機会に詳しく触れたいが、他に「春夏秋冬」「真竹草」など、道真が独自に唐詩から取り入れ、もしくは創出し、日本文学に広まっていった語彙がまだ多くある。今回取り上げた「欹枕」はそうした語彙の一例に過ぎない。

この考察で、日本漢文が取り込んだ漢語表現・漢文表現が、後の和漢混淆文の日本文学にも大きな影響を残していることを垣間見ることができた。また、そのような日本語の語彙史の一面を明らかにする上でも、日本漢文の語彙研究をより一層進歩させていくことが望まれよう。

【注】

(1) 研究史を再度概観すると、それらでは未整理のままであるが、以下の諸点にわたっての解釈の相違と議論が展開され、本テーマの研究課題となってきたことが、わかる。新たな視点から細かく整理すると、次のようである。本稿では、紙幅の都合もあって、そのうち、本邦の文学作品での解釈に関わる重要な点に焦点を絞って取り上げた。触れ残した部分については、機会を改めて取り上げたい。（安部）

I 中国語

① 欵、欵々（枕）、漢字それ自体の用法とその解釈
② 「欵枕」熟語としての解釈 ア 詩語としての、イ 詞語としての、

③ 白楽天の使用法の解釈

④ 日本漢文での受容

⑤ 博士家および菅家での受容

⑥ 菅原道真の受容

⑦ 紫式部の受容（『源氏』での受容）

⑧ 中古和文体での白氏を踏まえた受容

⑨ 中古における「そばだつ」の受容

⑩ 中世以降における「そばだつ」の受容

⑪ 「耳をそばだつ」などの「そばだつ」の意味的派生

⑫ 和語「そば」自体の語源的解釈、および、「目をそばめる」ほか「そば」の複合語の解釈

(2) 加固理一郎（1998）は、埋田氏以後にあってもなお唯一、「工藤氏・戸川氏の解釈『角枕を不安定な姿勢に立てて傾側させること』を支持するもの」である。その論拠は詰めれば「日常的にありふれた寝姿を示すものでないほうが、この作品に用いられるにふさわしい詩語となる」、「この新奇な詩語」である『欵枕』もまた『撥簾』と同じく、特殊な動作として解釈した方が、詩の構成上、自然であろう。という、詩語としての表現効果に求められている。しかしながら、「新奇な詩語」

(加固氏)とすれば、それこそが白氏があえて詩語として「運び取った」理由とすることもでき(一方、当時、語形として既に新奇でないという指摘は本文参照)、また、単なる横臥ではない側臥姿勢を敢えて詩の中に詠み込むこと、また、側臥姿勢に独特の詩情(2種あったが)を象徴させ得る語であることは、「日常的に」どうかという問題よりも、やはり「詩の世界」において(埋田説の側臥姿勢であっても)十分特別な意味をもっていた、と見ることができよう。本論中(三―(四))の次の部分も参照(安部)。(埋田説)「⑤白居易にとつて『欵枕』(枕に側臥する)(および「撥簾」(簾をささと撥ね上げる)の2語)は、『独善・自足・安眠・安逸によって達成される身心の「現状充足」の場を、よりよく象徴するものとして特別な意味をもっていたということ。』(三―(四))参照。

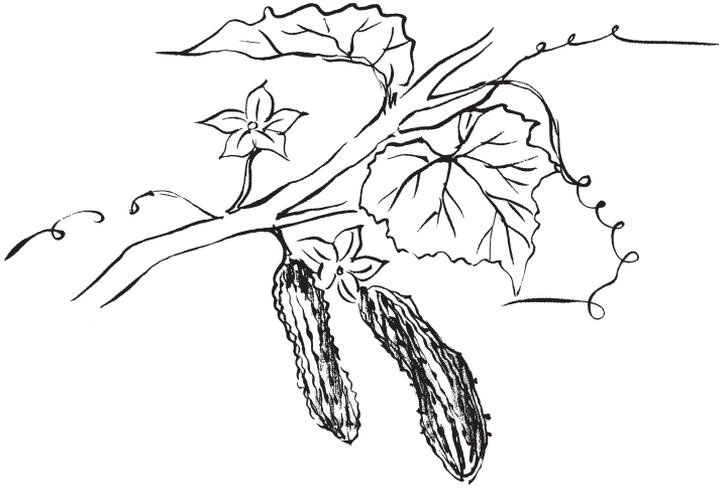
(3) 念のため付言しておけば、漢文訓読語とみなしたことに関わって、小山香織(2001)に次の傍線部のような表現があるが、引用の前半からわかるように、詩句「欵枕」に対する「漢文訓読表現」として「枕をそばだてて」全体を取り上げた上で、「枕」と対比するためにその動詞部分「そばだつ」を取り出して述べたに過ぎないと解せる。

*小山(2001)「漢文訓読語である『枕をそばだてて』が、和歌的表現である『枕浮く』と」(間の10行程略)「柏木巻の『枕をそばだてて』においては、『そばだてて』という漢文訓読語よりも、和歌において、独り寝の景物として歌われる『枕』ということばの方に」(傍線引用者)。

そのことは、一章二行目の関連記述からもわかり、また、上記以外にこの「漢文訓読語」に関する説明はなく、動詞「そばだつ」そのものの成立への言及ではない。(安部)

(4) なお、詳しくは別稿を予定しているが、この「そばだつ」は、紫式部自身の造語ではなく、博士家菅家の訓法を式部が作品に取り入れたと推定される。『源氏』の訓法が菅家によることについては、夙に小林芳規氏の御研究がある(小林芳規(1953・1966・1980)ほか参照)。菅家(ないしいずれかの博士家)による造語である蓋然性が高い。『源氏』という文学作品における漢文訓読語の採用が、後の現代語「耳をそばだてる」「目をそばだてる」を生み出す契機となった事例でもある。(この注および本文の根拠⑤⑥⑦は特に安部の記載と付す。)(安部)

(5) 清少納言と紫式部のどちらが先に白氏の詩を引用したかは、それぞれの成立時期とも関わって、興味深いテーマである。『源氏』でのこのような含みの多い引かれさまの強さから、我々はひそかに、『枕草子』の当該章段を見て「須磨」での引用が描かれたと見たのであったが、もはやそれを詮索する紙幅がない。



〔그림 32〕 071 o-i

図 1

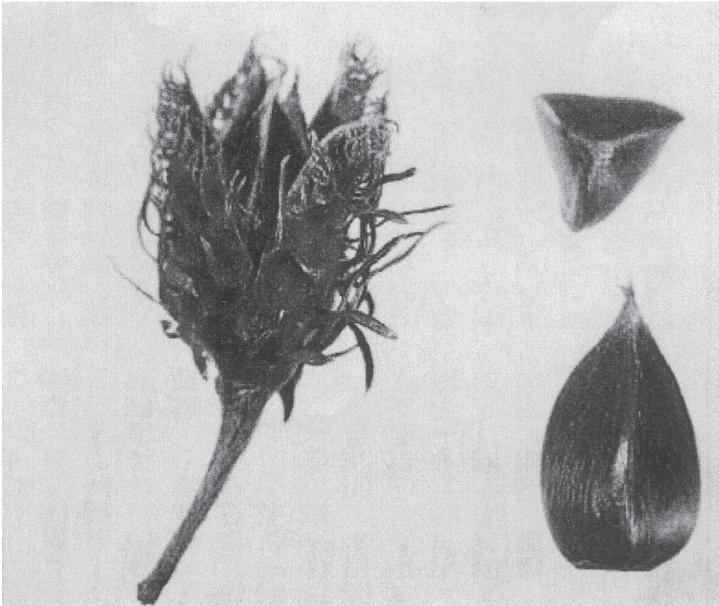


図 2

【補注1(五)(二)】「源氏物語絵巻」の柏木が描くのも「側臥」である。なお、枕自体は多少高さがあるように見えるものの、他の絵巻・絵図の枕と比較しても縦置きかどうか明確ではない。むしろ、明らかな縦置きと描かれていないところに当時の解釈がうかがえようか。絵図などの枕については機会を改めたい。清水靖彦『日本枕考』も参照。

【補注2(六)(二)】「そば瓜」の異名をもつキュウリは、現在の改良種ではその稜線よりもトゲの方が印象に残る。しかし、図1の描かれ方のように古くはその縦線も特徴であったことがわかる。

また、「そば栗」等の異名を持つブナの実も、ソバの実の同様に、その稜線に特徴がある(図2)。「ソバ麦」の異名をもつ蕎麦の実にも稜線がある。先や角がただ単にとがっているだけの種ならドングリをはじめ多く存在するが、「ソバ」という語は稜線(角ではなく)があるものだけに使われていることが共通している。

図1 出典 韓国精神文化研究院(1980)『韓国方言調査質問紙(図冊)』 韓国の図であるがより古い形態の特徴がわかる。
「[図32] 071 きゅうり」とある。「○」はオイキムチのオイで胡瓜。

図2 出典 Yahoo!検索(画像) サイトにて二〇二二年に「ブナ」で検索できたものである。「725896a1a819ea07f6c4496766263」と記録していたものであるが、二〇一三年一月現在、検索では見られなくなっている。

【参考文献】

《辞書・資料・索引関係》(こは主に著者の五十音順)

内田順子『田氏家集索引』平成四年 和泉書院

岡田正之『日本漢文学史増訂版』昭和三十五年 吉川弘文館

川口久雄・若林力『菅家文草・菅家後集詩句總索引』昭和五十三年 明治書院

簡野道明『増補字源』昭和三十年 角川書店

柴田甲二郎『懐風藻漢字索引』昭和三十一年 日本上古史研究会

當山日出夫『千載佳句漢字索引』昭和六十三年 勉誠社

中村璋八・島田伸一郎『田氏家集全釋』平成五年 汲古書院

芳賀紀雄『文華秀麗集索引』昭和六十三年 和泉書院

- 『日本古典文學大系72 菅家文章 菅家後集』昭和四十一年 岩波書店
『日本古典文學大系69 懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』昭和三十九年 岩波書店
『新日本古典文學大系20、22 源氏物語 一、四』平成六、八年 岩波書店
『新編日本古典文學全集21、23、24 源氏物語 一、四、五』平成六、八、九年 小学館
『新釈漢文大系 白氏文集』昭和六十三年 明治書院
『日本古典全集 懷風藻 凌雲集 文華秀麗集 経国集 本朝麗藻』大正十五年 日本古典全集刊行會
『漢籍全文資料庫』<http://hanchi.hnp.sinica.edu.tw/inp/hanji.htm> 史語所漢籍全文資料庫計畫
『全唐詩檢索系統』<http://cls.hs.yzu.edu.tw/lang/Database/index.html> 國科會數位典藏國家型科技計畫

《論文・研究書》（後半の***以降が、中山の卒論以降の安部の追加、各々五十音順）

- 岩城秀夫「遺愛寺の鐘は枕を欵てて聴く」『国語教育研究』第八号 昭和三十八年
埋田重夫「遺愛寺鐘欵枕聴」考『中國文學研究』十四期 昭和六十三年 早稻田大學中國文學會
枝村雅子『菅家後集』小攷『山口国文』第十二号 平成元年 山口大学文理学部国語国文学会
工藤肇『欵枕』について『中国語學』72号 昭和三十三年 中国語学研究会
谷口孝介『菅家後集』と『白氏文集』と『同志社国文学』第六十一号 平成十六年 同志社大学国文学会
松浦友久『万葉集』という名の双関語（かけことば）『日中詩学ノート』平成七年 大修館書店
焼山廣志「菅原道真研究」『菅家後集』全注釈（一）『国語国文学研究』第三十八号 平成十二年 熊本大学文学部国語国文学会
柳澤良一「菅家後集」注解稿（一）『北陸古典研究』第十五号 平成十二年

- 太田次男「白詩受容考——「香鑪峯雪撥簾看」について——」『藝文研究』33 昭和四十九年 慶應義塾大學文學部藝文學會
加固理一郎「白居易の「遺愛寺鐘欵枕聴」について」『調布日本文化』八号 平成十年 ※「欵枕」の論としては最新
桐原光明「横瀬夜雨の「欵枕録」について——新資料発見——」『解釈 国語・国文』30—12

小林芳規「神田本白氏文集の訓の類別」『国語と国文学』40—1号 昭和三十八年 東京大学国語国文学会

小林芳規「漢文訓読史研究上の一応用面—伝菅原道真訓点の検討—」『国文学攷』40 昭和四十一年六月

小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』昭和五十五年 東京大学出版会

小山香織『源氏物語』の「枕をそばだてて」——恋いわびる独り寝の男君たち——『瞿麦』14号 平成十三年

清水靖彦『日本枕考』平成三年 勁草書房

下定雅弘・新聞一美『白居易研究講座第七卷 日本における白居易の研究』214-215 平成十年八月 勉誠社

新聞一美『平安朝文学と漢詩文』平成十五年 和泉書院（研究叢書293）

新聞一美『源氏物語と白居易の文学』平成十五年 和泉書院（研究叢書294）

菅野禮行『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』昭和六十三年 大修館書店

鄭 虹「日本漢詩に於ける「和習」の問題——菅原道真の作品に即して」『国語国文学研究』第二十四号 昭和六十三年 熊本大

学文学部国語国文学会

戸川芳郎「枕をそばだつ」解『解釈と教材の研究』8—5号 昭和三十八年 学燈社

戸川芳郎「岐枕について」補論『汲古』14号 昭和六十三年 汲古書院

中島和歌子「白詩語「撥簾」受容考—菅原道真を中心に—」『和漢比較文学』13号 平成六年

日向一雅『源氏物語と漢詩の世界——『白氏文集』を中心に』平成二十一年 青簡舎

藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』平成三年 東京大学出版会

藤原克己『菅原道真——詩人の運命』平成十四年 ウェッジ選書

松浦友久「遺愛寺鐘欵枕聴考—詩語とその受容（日中詩学ノート11）」『月刊しにか』3—8、平成四年八月 大修館書店

【付記】

①末岡実氏（フェリス女学院大学教授）には先行研究や唐詩等についてご助言戴くことがあった。感謝の意を記します。

②本稿は次の口頭発表を経ている。ご質問下さった方々に感謝致します。中山大輔・安部清哉「遺愛寺の鐘は」枕を欵てて（聞

く）追考——唐詩詩語『欵枕』の受容と変奏——」（青葉ことばの会、2012年4月14日（土）、学習院大学）

③本稿は、中山氏が学習院大学に提出した卒業論文がもととなっている。中山氏は、卒業指導によく応え、またよく耐えた。卒論をまとめ直した草稿へさらに加筆を助言し（例えば、先行諸説追加と解説、辞書・漢籍の事例の追加ほか）、②の口頭発表を行ない、安部による関連文献の追記や加筆、章節の組み替えを経たものである（一章、七章（一）、八章（一）、九章などに彼の文体がよく現れている）。先行研究ほかへの目配り、特に漢籍関係は学部学生ゆえに如何ともしがたいものがあり、加筆せざるを得なかった。

一方、中山氏の独自のものであった「枕をそばだつ」というフレーズ全体で当初から「欵枕」に対応して成立したとした着想、「枕」が身体を象徴していると見た発想、日本での受容の特性（特に『後集』と『源氏』との強い関連性）に関する部分は、追加した先行研究を見渡しても、いまだ新見として生き残り得る、もっとも興味深い独自の解釈であった。「漢文訓詁語」と見なした名付けや、ソバの語源や「側」の意味を読み取ること、ソバの複合動詞用法や慣用句の「を格」のこと、菅家の訓詁との関わりなど、専門的賢しらによる補強は、驥尾に付しただけの安部の蛇足でしかない。特に先行研究に関わる細かな研究史上の補筆の面があるので、中山氏との連名とさせて戴いた。道真ファンという若い新鮮な着眼を、ともに楽しんでいただければ、幸いである。（安部記）

……と、型通りの付記は、上記までで終えるつもりであったが、最後に、一点だけ追記させていただきたい。

中山氏の草稿のまま活字化することも当然考えた。しかし、そのままでは、「緒言」にも記載した課題にも答えを出している本解釈が、論証不足と受け取られおそらく埋すもれてしまうであろう、それはあまりに惜しい、という理由以外に、安部個人としては、紫式部の言葉の紡ぎ出し方に個人的関心があり、それもあえて追加調査を加えた理由であった。

『源氏』では、やはり漢文訓詁語でもあり、マイナスの意味を負う「まなこ（眼睛）」をいう語が（「まなこみ（目付）」を含め）、敢えて不義の子の視線のために使用されている（安部（1989）の注部分参照）。また、浮舟巻では『篁物語』の一〇行程の短い一場面を物語の下敷きとしつつ、その中の一首を引き歌とする同じ構図の和歌が詠み込まれるなど（安部（2010）、ことばのその生かし方（運用）は興味深い）。

○安部清哉（1989）「古代語彙における併存する同（類）義語——目・マナコ型の東西分布——」『玉藻』24、注参照、

○安部清哉（2010）『『篁物語』の井野葉子氏「源氏物語」浮舟巻での引用』説補強ならびに祖形小考』『古典語研究の焦点』

—— 武蔵野書院創立90周年記念論集』武蔵野書院、

—— 以上

唐詩詩語「欹枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて（聞く）」（側臥）（安部・中山）

一一一